
詐欺師も所詮は男であって・・・

もこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詐欺師も所詮は男であって・・・

【Nコード】

N2126BA

【作者名】

もこりん

【あらすじ】

天才詐欺師の椎名紫闇の今度の獲物は、ファミレスで働くおっとり少女の十六夜美姫。

彼女をターゲットとして一緒に暮らすことになったが彼女の実家はあたりでは有名なやくざ一家！！

騙せば殺され、事実を言っても殺され、別れても殺される！

そんな紫闇に残った選択肢は、美姫とうまく付き合っていくことだけでっ！？

事実は小説よりも奇なり

「えっ！もしかして私・・・騙されたの?!」

詐欺師の手に掛かった者たちは、今宵もこの言葉を静に呟いている。

今回の獲物は世間知らずのお嬢様だった。俺、椎名紫闇しいなしおんはたぐいまれなる技で結婚を夢見る女性に近づき、罠にはめる。いわゆる結婚詐欺師だ！

そして俺の個人情報は一切手に入らない。名前も履歴もその場のぎのものの・・・。

そんな俺の次のターゲットとして選ばれたのは、俺が前から気にかけていたファミレスで働く少女。

おっとりとした雰囲気を持ち、この世の汚い部分など何も知らなそうな現代では珍しいタイプの少女だった。

だが、その割には身につけているものはどれも高級品ばかり・・・。容姿もまずまずだった。

詐欺師にとっては夢のようなターゲットだ。

俺はさっそく作業に取り掛かった。

ファミレスに行き席に着くと、なんと彼女の方から声をかけてくれた。

「いらっしやいませ！ご注文がお決まりになりましたらそちらのボタンでお知らせください」

彼女はそう言ってボタンを指さすと、お盆から水を持って俺の前に置いた。

「ありがとうございます」

いつものパターンならここで俺がコップを倒して会話の輪をひるげる。

多少ベタだが『事実は小説よりも奇なり』なんてことわざがあるし、それに世間知らずの奴には多少怪しくても大丈夫だったりもする。むしろこういう出会いを望むロマンチストだっているはずだ！！

だが、今回はいつもと勝手が違った。

彼女が「はい」と紫闇の目の前に置こうとしたコップは彼女の手からこぼれおち、なんと俺の顔面にコップの水が思いっきりヒットした。

「あっ！！ご、ごめんなさいっ！」

彼女は謝りながら布を取り出して俺の濡れた部分を拭いた。

「本当にごめんなさい・・・」

「だ、大丈夫ですよ。よくありますから」

あまりのいきなりの出来事に俺はつい言葉の選択を誤った。

今の現状は、カレーうどんの汁を服に飛ばしてしまったとはわけが違う。

水を顔面にかけられるなんてそうそうない。

せいぜいそんな体験は別れ話を切り出した時か、いじめにあっているかだ。どちらにしても決して良い印象をもってはくれないだろう。

「おいっ、君！何しとるんだ！」

どうやら騒ぎを聞きつけて責任者が来たらしい。

彼は、彼女が必死に俺の濡れた顔を拭いている布を奪い取った。

「君！これは濡れた床を拭くものだと教えただろう！」

彼女は半泣きになりながら責任者さんに言い返した。

「で、でも、店長がこれは濡れた所を拭くものって・・・」

どうやら彼女にとって俺は濡れている床と同じ扱いだったらしい。

そして散々叱られた揚句、結局彼女は店をクビになった・・・。

袖すりあうも多生の縁

俺は仕事をクビになってしまった彼女と公園のベンチに座っていた。

「あの、さっきは本当にすみませんでしたっ。私馬鹿だからよくあるんです」

彼女は申し訳なさそうにうつむいたまま何度も俺に謝罪してくれた。

「いや、全然平気だよ。それに少しラッキーだった。君と知り合えるチャンスが出来たんだから」

こういう落ち込んでいるときにこそ慰めの言葉は胸にしみるものだっ！彼女を虜にするには今しかない。

「ありがとうございます・・・あの、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

よしっ！彼女は段々と俺に対して警戒が薄れてきている。这样的话付き合うまでは割と早いはずだ！

「俺は椎名紫闇。君は？」

「私、十六夜美姫と申します」

「あのさ、携帯のメアドとか教えてくれないかな？変な意味じゃなくて、今日こうして出会えたのも何かの縁だと思うし。急にバイトをクビになっちゃったら色々大変だろ？なんでも相談に乗れるように・・・」

「ありがとうございます」

こうして俺らはメアドを交換した。今の会話を聞いて「うさんくさい」とか感じる奴ら！そこは深く詮索するなっ！袖すりあうも多生の縁っていうだろ？今日いきなり会った客とメアド交換なんてめったにないけど、多生の縁でも利用できるものは利用しとくもんだよ。

それから俺らはしばらくベンチで話しこんでいた。

「・・・実は私、今家出してるんです」

「家出？」

「はい。私の父親が本当に口うるさくて、それで勢いで・・・知り合いに協力してもらってアパートを借りるところまではなんとか出来たんですけど、バイトクビになっちゃったから、もう家賃が払えなくなってる・・・」

彼女にとっては大惨事だろうが俺にとってはまんざら悪い話でもない。

「じゃ、じゃあさ、次の仕事が見つかるまでの間だけ、俺の家に来ない？」

「い、いいんですか？」

こんな怪しい話になんのためらいもなく乗ってくるのは、おそらく彼女だけなので、お勧めは出来ない口説き方だ。

俺自身、こんなにあっさりOKしてくれるとは思わなかった・・・。

こうして俺と美姫さんとの同居が始まったわけだ。

恩に着る

俺は美姫さんを家に連れて自宅へ帰っていた。

「ここが俺んちだよ」

俺はそう言ってドアの鍵を開けて彼女を中へ通した。

「うわゝ。素敵なお部屋ですね」

彼女は部屋を一通り眺めていた。

「紫闇さんってお仕事は何をしているんですか？」

「俺？ 実はフリーターでさ。レンタルビデオ店のバイトしてんの」
これは嘘ではない。さすがに「詐欺師です」なんてことは絶対に
言えないので、とりあえずアルバイトの方の事を言って、フリータ
ーということにしてあるのだ。

「へえ、レンタルビデオ店ですか……。すごいですね、ちゃんと
バイトを続けてお家を借りて、尊敬しちゃいます」

「そんなことないよ。俺から見たら、美姫さんの方がすごいと思う
……。いきなり家出して、バイト見つけて頑張ってる。今回はちょっ
と運がなかったただけだよ」

「いえ、違えます。」

「何が？」

「今日のバイトで5回目なんです。クビになったの」

俺はその話を聞いた後に「えっ」と言葉を漏らしてしまった。確
かに今日の彼女の失敗は偶然なんかでかたづけられるようなことでは
なかった。しかし、まさか5回もチャンスが無駄にしていたとは
……。

「私、本当に馬鹿ですよね……。今日だって紫闇さんに助けでも
らわなかったらどうなっていたか」

「いや、俺は美姫さんみたいに可愛い人とかうして一緒に暮らせる
ことになってすっごい嬉しいし、俺は美姫さんのそういうおっとり
してるところ、嫌いじゃない」

俺は美姫さんから視線をそらした。

勿論これは演技上のセリフだが、女の子にこんな言葉を言うのは何回やっても慣れないのだ。

「ありがとうございます！私も紫闇さんの事、大好きですっ！」

「だ、大好きっ!？」

出会ってものの数時間でそんなことを言われたのはおそらく詐欺師人生で初かもしれない。

「だって、見ず知らずの私を自分の家に置いてくれるなんてそうそうないことだし、紫闇さんのそういう優しいところが私は大好きです」

美姫さんの輝くような瞳に俺は一瞬心苦しくなってしまった。彼女の様な純粋な目が俺の一番嫌いなものだった。

どうやら彼女にとって俺のといった行動はそうとうにありがたいものなのだろう。

まあ、早い段階で色々之恩を着せといった方が仕事も早く済みそうだし、詐欺師としては中々の展開だ。

それから美姫さんに夕食を作ってもらい、二人でそれを食べていた。彼女は意外に料理は結構上手かった。

そのあとは、色々と世間話をしていた。二人に訪れた穏やかな時にそれは突如起こった。

「おい！ちよつと邪魔するぜっ！」

いきなり扉を蹴り破って厳つい男どもが入ってきた！

奴らは俺と美姫さんの手を縛り、車に乗せた。

「あ、あなた達は・・・」

さすがに動揺しているのか、美姫さんの声は震えていた。

「お前らはなんなんだよ！」

俺も美姫さんの後に大声で叫んだ。

「テメーはおとなしくしてろ。そうすれば手荒なことはしない」

俺達は満月があたりを照らす中、何もできずにただ先の見えない

道を進んでいった。

人はみかけによらない

俺と美姫さんは謎の男達に連れられて、とある屋敷にやってきた。そこは木造建築で、庭や外観を見ただけでも和風という雰囲気がある。そこら中に漂っていた。

何も申し分ない屋敷あったが、ただ一つ不安に思うのは俺の前に現れる屋敷の男どもが全員こわもてだったということだ。

車から降ろされて屋敷の中に入ると美姫さんとは別の部屋に連れてこられた。

俺は今にも心臓が張り裂けそうな勢いのまま和式の部屋に連れてこられると、乱暴にそこに捨てられた。

部屋の中には周りにこわもてが数十人くらいいて俺を囲むように立っていた。

さらにしばらくすると、こいつらの親分のようなおっさんが部屋に入ってきて、俺の前に座り込んだ。

「テメー、ここをどこだか知ってんのかい？」

随分と低い声でしゃべる相手に俺は恐怖の限界を感じていた。

「い、いや、さっぱり。でも、みなさんはやっぱり、ど、どこかのやくざさんとかですよね」

俺はなるべく怒りを買わないようしゃべり方をした。おそらく無駄だろうが・・・。

「俺らはよ、やくざの世界じゃ誰でも知ってる関東やくざ一家の一角。常夜の十六夜一家と聞きゃ、逆らうものはねーんだよ？ 堅気には聞きなれねー名前かも知れねーがな」

「い、十六夜組っ?！」

俺もどちらかといえばそっちの世界の人間だから、その名前は何度も聞いたことがある。おそらく、本当の堅気でも、知らない奴はいないだろう。

俺らの世界では、常夜一家と言われれば通じてしまおう、最も関わってはならないやくざ一家として有名だった。

「そ、その名前なら十分聞き及んでますっ！！そ、それでっ、俺に何か用でも？」

「しらばっくれてんじゃねーよ？うちの一人娘をたぶらかしといてよっ。身に覚えがないとは言わせねーぞ！」

たぶらかした覚えなら何度もある。それが職業だし……。ただ、誰がこの親分殿の一人娘なのかは全くわからなかった。

今まで騙してきた数もさることながら、それっぽい奴も騙した中には何人か混ざっていたからだ。

「お、覚えがないというか……。本当にそれは、俺なんでしょうか？」

「はっ？！こっちはな尾行してしっかり証拠押えてんだよ！テメーはやくざ界のルールに従って死んでもらうぜい」

俺はその言葉と同時に親分が懷から取り出した短刀を見て、命を終わりを察した。

親分が勢いよくそれを身動きの取れない俺に突き刺そうとした、まさにその瞬間だった。

「パパッ！！いい加減にしてください！」という声とともに思い切り開いたふすまの音で、親分の短刀は俺の胸の一ミリ先で止まった。命を救ったと、涙を流しながら親分を止めた声の方を見ると、そこには美姫さんが立っていた。

「み、美姫さんっ！！！」

俺の声に気が付き、駆け寄ってきた美姫さんは「ごめんなさい……。」と呟きながら俺の手のロープをほどいてくれた。

「美、美姫さん。君って、この一家の子供だったの？」

「はい……」

美姫さんは一度も俺と目を合わせることなく頷き、一家の親分に向かつて怒りだした。

「パパッ！この人は私の命の恩人だって何度も話したじゃないです

か!!この人は私をたぶらかすどころか、行き場のない私を何も言わずに救ってくれた大切な方なんですっ!」

「で、でも!パパに内緒で、年頃の娘が男と一つ屋根の下なんて・・」

「パパは私にちくいち見張り役をつけてるじゃないですか!家出した後もっ。わざわざ言う必要ありません」

「だ、だがなく」

美姫さんへのうろたえぶりにさっき見た親分としての威厳が嘘のようだった。

「とにかく、もうこんなことはしないでください。紫闇さん、今夜は遅いですから、どうぞ家にとまってください。部屋を用意させますから」

「い、いや俺は・・」

「早くここから逃げ出したいですか?」

「いえっ!ぜひ泊まらせていただきますっ!!」

俺はとっさに心にもないことを言ってしまった。厳密にはとっさというよりも、断られそうになった時の美姫さんの悲しそうな表情を見た、いかついお兄さんたちからの視線に根負けしたのだ。

その日の夜、俺は全く寝付けなかった。美姫さんがまるで宿屋のような立派な一室を用意してくれたのだが、やくざ一家の家と聞いてぐっすり寝れる奴なんてこの世のどこにもいないだろう。

それにしてもまさか美姫さんが常夜一家の娘だったとは。人はみかけによらないなんて言葉は彼女にこそふさわしい。

そんな事を考えていると、ふすまをたたく音で俺は布団から起き上がった。

「はい?」

「あ、あの、美姫です」

俺の部屋に訪れたのは美姫さんだった。

するのは失敗、何もしないのは大失敗

部屋に訪れた美姫さんを部屋に通すと、彼女はいきなりこう言うてきた。

「しばらくはここには誰も来ないと思います。今のうちに逃げてください。後は私がなんとかしますから」

あまりにも予想だにしていなかった言葉に俺は混乱してしまった。
「なんでいきなり・・・」

「紫闇さん、早く帰りたいと思ってるでしょ？」

俺はあまりにも的確な答えを出されてしまい、心拍数が少し上昇した。

「なんでそんな事・・・」

「ここに来る一般人はみんなそういう顔をするんです」

「えっ？」

「どんなに仲良くなった子だって、私の事情を知れば遠ざかって行ってしまう。だから私はそのうち自分から人と関わらないようになっていきました。だから、紫闇さんがなんのためらいもなく私を受け入れてくれてとてもうれしかったです。・・・でも、ふと気がついたんです。あなたが優しくしてくれたのは私の事情を知らなかったからなんだと。紫闇さんが本当は逃げ出したいというのならっ」

「俺は、ここから逃げねーぞ」

「えっ?!」

俺は自分でも驚くような言葉を出した。おそらくここから逃げ出せる唯一のチャンス逃したのだから。

「俺がここから出て行くときは、お前も一緒に連れていく」

「でも、私の事怖がっているんじゃない？」

「俺が怖がってたのはやくぎであって、お前じゃないよ。たとえばお前がどんな事情を持っていたとしても、俺がお前を好きなのは変わらない」

「す、好きっ!？」

俺はついヒートアップしすぎて自分でも気がつかないうちにとんでもない事をいってしまった。

「す、好きってのはあれだぞっ。お前の性格を嫌いになれないってことで!」

こうなるとなにを言っても、そういう意味にしか聞こえなくなっってしまった。

「と、とりあえず!俺はこの世で誰からも愛されている奴がいなと思うし、逆に誰からも愛してもらえない奴だっていないとおもう。外の世界がお前の事を拒むなら、俺がお前の友達になってやるからっ」

その言葉を聞いて美姫さんは「ありがとうございます」と言いながら泣き出してしまった。

それにしてもあの言葉を言っただけからのこれはどう聞いても告白にしか聞こえないのは俺だけだろうか……。言っておくけど、俺はそういう意味で言っただけではないから!ただ、こんだだけ純粋な奴がこれ以上傷つく姿を見たくなかっただけで。第一、俺とこいつとは詐欺師と獲物の関係だっただけを忘れるなよっ!

俺はあくまで詐欺師として、こういう事を言っているんだからな。するのは失敗、何もしないのは大失敗って言うように、俺はたとえやくざの娘であろうと騙しぬいて、生き抜いてやるんだ。

「だから、逃げるなら一緒にっ」

バンッ!!

気を取り直して、美姫さんに話しかけた俺の声をかき消す勢いでいきなり部屋のふすまを開けたのは彼女の父親だった。

「話は全部聞いたぞ。ちよつと来てもらおうかつ!」

父親の顔はとても恐ろしい顔をしていた。まさか、俺のあの告白ともとれる言葉を聞いてしまったのだろうかっ。

それとも、泣いている娘を見て何かを勘違いしているのかっ。

どちらにしろ俺は命の最期を改めて予感した。

アワビの貝の片思い

俺と美姫さんは美姫さんの父親に連れられて、誰もいない部屋に
来た。

部屋に入ると父親は美姫さんに尋ねた。

「美姫、さっきの話だが、お前はその男に告白されたのか？」

父親の率直な質問に対して美姫さんは頬を赤らめながら答えた。

「は、はい・・・」

えっ?! そうだったっけ?!

彼女に悪気はなかったのだろう。だが、おそらく恋愛経験や同い
年の男性との関わりがあまりに少ないことから、俺のあの言葉を思
いっきりプロポーズと勘違いしてしまっていた。

「そうか・・・。お前はどうするんだ？」

「わ、私も紫闇さんのこと、大好きです！」

えっ?! そうだったの!!

まさか、この短時間でこんなにも彼女が俺を思っていたなんて想
像もしていなかった。俺にとっては彼女ができたというより、年下
に懷かれたような感覚でしかなかった。

その後彼女の心の内をすべて聞いた父親は美姫さんを先にさがら
せ、しばらく俺と父親との沈黙が続いた。

「・・・おいつ、お前っ」

先にこの沈黙を破ったのは父親だった。

「はいっ！」

「お前は、本当にあいつを愛しているんだろうな？」

「えっと・・・、あ、あれはプロポーズというわけでは・・・」

「なにっ?!」

俺の言葉を聞いた父親の顔が恐ろしい形相へと変わっていった。

「プ、プロポーズとかそんなのではなく、彼女の昔の話を聞き、今
でも変わらず苦しんでいるあの子の心を少しでも楽にしてあげるた

めに、まずは彼女の悩みの種のうちの一つである交友関係を俺と友達になることで晴らしてあげようという事で・・・」

俺はなるべくさし障りのないように、先ほどの誤解を解こうとした。

すると、話を聞いた父親は立ち上がり、段々と俺のそばに歩み寄ってきた。まるで鬼神が歩み寄って来るかのようなその威圧感に俺はどうする事も出来ず、ただ固まっていた。

俺の目の前まで来た父親はしゃがみこみ、彼の右手を大きく振り上げ・・・俺の肩に置いた。

「お前のような男を待っていたぞ！」

「は、はい？」

俺は言葉の真相が全く読めなかった。ポカーンとしている俺の顔を見ながら父親は笑顔で俺に話しだした。

「今まであいつの元に来た求婚者は、いずれも詐欺師か遊び人のチャラ男だった。だが、お前はそのどちらでもない」

せ、先人がいたー！！

まさか、俺以外にもあいつを狙っていた詐欺師がいたとは・・・。

「あ、あのくちなみにその方たちはその後どうなったんでしょうか？」

「チャラ男はわしらを見た瞬間、脱走したために島流しにした。詐欺師は、最後まであいつを騙し続けたのに気付き、我らのルールで抹殺した」

詐欺師の先輩は先にあの世に葬られていた事に気が付き、俺は一気に目の前が真っ暗になった。

「そんな事が続いたためか、そのどちらにも似つかわしいお前を少々危険視していたが、わしの勘違いだったようだな」

なぜ勘違いという結論にたどり着いたのかは知らないが、さすがはやくざの頭だけあって、勘は鋭いらしい。

「なぜ、僕はそいつらとは違うとお考えになったんですか？」

「お前はしっかりと順序をわきまえていたからだ」

「順序？」

「初めはあの言葉を告白かと思ったが、あれはわしらの勘違いで、お前はお友達から始めてくださいと言いたかったのだろうか？」

えっ……。さらに勘違いされているー！！！！

まさかあの誤解を解くための言葉をさらに誤解されて聞かれていますとは……。

「美姫も今までの誰より、お前を気に入っているようだしな。これからあいつの事をよろしく頼むぞ。それから、同居も認めてやる」これは完全にアワビの貝の片思いというやつだ。

まあ、最悪の事態は逃れたし、これも一種の逆転劇なのだろうか。

こうして、俺と美姫の恋愛劇場が幕を開いたのであった。

猿も木から落ちる

太陽がまだ昇りきらない明け方、俺はようやく美姫とともに自宅に帰還した。

あの後、美姫の父親でありやくざ、十六夜一家の親分の座に就く十六夜京輔いざなぎょうすけから美姫と同居するにあたって守らなければならない規則を言いつけられた。

？美姫を泣かせない事

？美姫に嘘をつかない事

この他にもまだまだ規則はたくさんあるが絶対に守らなければならぬのがこの二つだった。

まあ、簡単にいえばこれらの規則を破れば問答無用で殺されるという事だ。そう思っただけで頭がさえてきてしまい、結局その日は一睡もできなかった。

自宅に帰ってもそれは同じ事だった。

「紫闇さん！」

頭を抱える俺に、そんな掟など何一つ知らない美姫が話しかけてきた。

「どうしたんですか？美姫さん」

「あの、台所を借りてもいいですか？」

「はい、別に良いですけど・・・」

俺の返事を聞くと嬉しそうに美姫は財布を持って、どこかへ向かって言った。

その後俺は気持を入れ替えようと風呂に向かった。

風呂にはいってしばらくすると、ドアが開く音が聞こえた。さっき出て行った美姫が返ってきたのだろう。

俺は風呂場から上がり、髪をタオルへ拭きながら居間に戻った。そこで俺は目を疑った。居間のテーブルには並びきらないほどの料

理が置いてあった。

「あっ、紫闇さん。お風呂から上がったんですね！」

そういつて、台所から姿を見せた美姫さんはエプロンを身につけてフライパンを手にしていた。彼女が俺のためにこしらえてくれたものだというのは聞かずとも察す事が出来たが、とりあえず彼女に尋ねてみた。

「これ、美姫さんがっ？」

「はい、お口に合うかどうかかわからないですけど・・・」

案の定これは彼女が俺の為に作ってくれていたものだった。

支度がすべて終わると、彼女は俺をテーブルの前に座らせた。

「昨日色々ご迷惑をおかけしてしまいましたし、ほんのお礼です」

「あ、ありがとうございます」

俺が料理を食す事を促すかのように、彼女は俺の事を、その輝いた目で見つめた。俺は目の前にある箸を手取るが、中々料理に手が出なかった。

食欲がないわけではない。むしろ昨日の夜から何も食べていないからかぶりつきたいくらいだ。

だが、長い事結婚詐欺師として、女性と交際を続けてきた紫闇にはとある経験があった。それは、料理の味だ。どんなにおいしそうに見えても、世間を知らずに育ってきた箱入り娘の料理は今までことごとく不味かったのだ。

彼女また、あの京輔さんに育てられた箱入り娘。さらに超がつくほどのドジなのを知っている。そんな彼女にはたして人並みの料理が作れるのであろうか？

だが、俺にはいろんな意味で彼女の前で不味い表情を取ることはできない。たとえどんな味でも笑顔で褒め称えて、完食しなければならぬのだ。俺はしばらくその覚悟を整えていたが、これ以上は彼女も待ってはくれないだろう。俺は意を決して彼女の愛情料理を口の中に放り入れた。

その瞬間、俺の全身に衝動が起こった。まるで電撃にでもうたれ

たような感覚に俺は数秒、動きを止めた。

「・・・あの、お口に合わなかったですか？」

俺の行動を見て、美姫は心配そうに尋ねてきた。

「・・・上手い・・・」

「えっ・・・？」

「美姫さん・・・。これ、マジで上手いよ!!」

そう俺の全身に響き渡った衝動は彼女の料理が不味かったからではない。むしろ、とうてい一般人には出せない味をこの短時間で事に醸し出していた。

俺の絶賛の言葉を聞いた美姫は頬を真っ赤にしながらもほっとしたように、そして嬉しそうに満面の笑みを浮かべたのだ。

その時の天使のような純粋な笑顔はきっと一生忘れることはないだろうと思うほどだった。

それにしても、彼女の料理がまさかここまでとは・・・。

この手の事で、俺の予想が外れたのはおそらく初めての事だった。これが猿も木から落ちるというやつなのだろうか。

それにしても、彼女の前では今までの経験など、まるで通用しないのかも知れない・・・。俺は彼女の料理を食べながら、そんな事を思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2126ba/>

詐欺師も所詮は男であって・・・

2012年1月12日19時50分発行